会長を引き受ける時、ある古い会員からご助言を頂き、第1にデフレで会費収入の維持が困難になる中で学会収支の健全性の維持改善、第2に利息収入が減っても学会の魅力は研究教育助成なので、元本を多少取崩しても研究教育助成を継続できるようにして後任の会長に引継いで欲しいと言われた。

平成13年が85周年になる事は承知していた。創立85周年記念事業は功労ある方々の表彰など行う必要があると思っていたが募金活動をしようなどとは全く思ってもいなかった。

木滑事務局長さんに基金取崩しのための定款変更の話をする。後刻文部省の指導官のご意見がもたらされ、できれば基金は減らさないようにとのことであった。そこで思いついたのは現在の東京電力債の利率6.7%が満期になり買い替えると1%強の利率に下がる。その利率差の少なくとも数年分を募金で集められないかということであった。

比較的不況に強い電力に意向を打診する事とし、業界首脳が集る平成13年1月9日の日本電気協会新年賀詞交歓会に出席した。ご担当の故・東京電力株式会社山本

勝副社長^(註)を探したが見つからず、さらに日本電気協会の方にも頼んで探してもらったが会場内では見つからなかった。あきらめて会場を出た先のエレベーターホールでたまたま電話をされていた目当ての山本さんに奇遇した。学会の苦境を説明すると協力しましょうといわれホッとした。1月の理事会に報告し、創立85周年記念募金を行う方向が確認された。

検討の結果、総額4000万円の募金規模となり、総会で定款を変更し取崩可能基金を設けることとした。創立85周年においても学会の魅力と発展のためには、研究教育助成、国際化、全国大会の活性化が必須である事に変わりがない。照明学会創立85周年記念事業委員長として、学会の魅力を増やすため心から会員の皆様のご支援ご協力をお願いする次第である。構造不況を打開するには研究開発に基づくベンチャー企業の育成が一つの鍵だとされている。当学会関係者から広く世界に役立つ研究成果が生れ育って欲しいと願うものである。

(注) 東京電力株式会社山本勝副社長は、平成13年10月11日に呼吸不全により急逝されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

<学会運営>

照明学会誌のこと

On the Journal of the IEI-Japan

河 合 悟
Satoru Kawai
名誉会員

1926年生。1953年慶應義塾大学大学院卒。1980年中京大学文学部心理学教授。1997年運輸大臣表彰受賞。現在、中京大学名誉教授。

◀キーワード：学会誌、編集

私が初めて学会誌の編集委員になったのは、現日本大学名誉教授の室井徳雄氏と故・寺村修氏が編集理事をされていた昭和39年だったと思います。それ以来、なぜそうなったのかは判りませんが、途中多少空白がありますが、平成7年頃までの約30年間、おしまいの頃はまるで“ぬし”みたいに学会誌編集に関わっていました。その間に学会誌の編集、発行などに起こったことを、思い付くまま書いてみます。記録などを確認しないまま書きますので、事実と違っていることがあるかも知れませんが、ご容赦下さい。

私が新米だった当時の学会誌のサイズは現在のサイズ(A4版)より小さいB5版でした。そして、論文と一般記事とを、現在のように別冊にしないで、同じ版にごちゃに掲載していました。論文投稿数も少なく、一件もない時や、多い時でもせいぜい二件どまりだったと記憶しています。編集委員会の委員数も10人弱で、昔の電気ビルの小さい部屋で会議をしていたような気がしています。一般記事はどうやって集めていたかは、末席にちょこんといただけだったので、全く記憶に有りません。特

集号なんて云うのはなかったと思っています。

いつからかは知りませんが、当事よりずっと以前から昭和60年頃事務局の小沢重雄課長が定年退職されるまでは、同氏が学会誌の編集から発行までの全ての仕事を責任を持って処理されていたので、編集委員会は論文の査読と一般記事を集めることだけが仕事でした。予算を見計らって、この記事は次号に回そうと云うようなことから、全ての記事の言葉づかい、使用漢字などの統一、図面の整備、トレースの発注、記事の割付け、印刷屋関係の全て(校正も含む)などなど、何から何まで同氏が一人でこなして居られました。

私が編集理事をお引き受けしたのが小沢氏の定年直前でしたので、同氏の退職後をどうするかを考えざるを得ませんでした。その時つくづく同氏が大変な仕事、数人分の仕事、を一人でこなしていたと云う事を思い知りました。

昭和54年、当日立の山根幹也氏が編集委員会の委員長だった時だと思いますが、その時、論文だけをまとめて論文号として年2回、一般号を年9回、年報を1回と

すること、及び、本のサイズをA4にすることが決まりました。また、その時、表紙のデザインを山縣信輔氏に委嘱して新しくしました。

その頃、論文投稿数が以前より多くなって来たのでこのように決まったのですが、論文の投稿数には波があって多い時は多いのですが、まるで投稿が無いような時もしばしばでしたので、論文が集まらなかったらどうしようと言うことを、相当心配されました。

話を変えて、年報についてちょっと述べます。年報に関しては編集委員会とは全く別の照明発達調査委員会と云うのがあって、その委員会が扱っていたと記憶していますが、年報の内容がいまいち何とかならないかと言う声が絶えずあって、これをいかに改正すべきかを検討する委員会ができたりした事もありましたが、内容に関しては、現在に至るまで大して変わっていません。編集方法に関しては、マイナーな変化が絶えずあって、現在のような形になっています。私が編集委員長をしていた時にも、当事、年報関係の委員長であった（委員会名は何であったか覚えていません）故・寺村修氏に色々と、結構つくづく、折衝した記憶がありますが、その内容は全く覚えていません。

話は戻りますが、その後、論文号が年4号となって現在に至っています。当事の委員会では、論文号を年4号にすると、学会誌が月刊誌である限り、一般記事にしわ寄せがあると云う理由で反対する委員が相当数いましたが、8月号を一般号とし、年報号を別冊にする事で決着したと記憶しています。

私の専門は心理学ですが、心理学会誌は全て論文だけです。そもそも学会は会員が論文を発表する場として作られているものであり、従って、学会と称する限りは、基本的には、学会誌発行と、年一回の全国大会と云うお祭をすることが、学会がなすべき仕事の全部であると思っています。ですから、照明学会誌でも、心理学会とは違う色々な事情がある事は判りますが、一般記事は投稿論文数の足りない分の埋め草であるとしても思ってしまうのです。これは次の事にも係わっています。

照明学会では、一般会員の会費全部を学会誌発行の費用に当て、電力会社などの大スポンサーが事務所の家賃を含めた事務にかかる費用などを持っているのが現状です。要するに、学会誌発行に当てる事ができる費用には限度があります。掲載すべき論分数が増えても一般記事を減らさないなら、学会誌の総ページ数が増え、当然発行費用も増えます。それまでも、使っていた費用は限度一杯だったのですから、当然赤字となります。そこで論文掲載料を超大幅に値上げしてこれをまかなっているのが現状です。と云うよりは、論文号発行に要する費用のほとんどを掲載料でまかなう仕掛けで、こうすれば掲載論文数がいかに増えようが、一論文のページ数が

いかに多かろうが、破綻を来さないと云うわけです。私はこのやり方は余り芳しいとは思いません。何となれば、これは論文を投稿することを主たる目的で会員になっている最も本来的な会員が最も割を食っていることになっているからです。

先に述べたごとく、私が編集委員長であった時（昭和59年）は、小沢課長の定年間際でしたので、同氏退職後、学会誌編集をどういう形でしたらよいかを、私と同時に編集理事に就任した河本康太郎氏と共に種々検討し、小沢氏がしていた仕事の主要な部分を外注することにして、小沢氏の後任には若い女性を当て、原稿の保管、郵送、種々の連絡程度の仕事だけを残す。外注の費用は両者の給料の差額程度を目処に外注先を探すという方針で各方面に当たって見ようということにしました。ところが、採用人事で当事の事務局長と意見が合わず、若い女性採用は実現しませんでした。実は、女性でなくても初任給は変わらないので当面は同じです。女性はすぐ辞めてしまうからだめだと言うのが局長の主張で、すぐ辞めるから次々安い給料ですむと云うのが私の考えでしたから、局長の主張の方が正当です。

理事の任期終了後も、二人で“学会誌編集のあり方検討委員会”と云うのを設けて、上記方針の実現に努めました。しかし、信頼できる編集をしてくれると思われる所は、金額の点でとても手が出ず、金額ではまああの所は今いち信頼できなかったり、こちらに相当量の仕事が残ったりでこれもだめ。当事印刷を頼んでいた奥村印刷は単なる印刷屋なので編集の能力はないが、小沢氏に適当な報酬を支払って編集の指導を受けるという形で試しにしばらく引き受けてもらったけれど、これもうまくいかず、結局、現在の丸井工文社と契約することになりました。契約内容は当時と現在とではだいぶ変わっています。

英文誌のことも書いた方が良いでしょうが、今回は止めることにします。

いつも気になっていることがあるので、この紙面を借りて、ちょっと触れさせてもらいます。

以前少人数でやっていた編集の仕事が、いつの日か段々膨れて現在は100名弱（80数名）の方々が編集に係わっています。全てボランティアです。昔は種々の委員会に出席している量に応じて、年末に相当高価なものが贈られていました。その後、それは廃止され、委員会一回出席毎に500円わたすことがしばらく続き、それも廃止され、現在では全くの無料です。私は無料であることは良いことだと思っています。けれども、ただだからと云って好い気になって委員会や委員数を増やすのは良く有りません。何事も適正值が有ります。編集委員会の仕事は編集の仕事のうちの記事を揃えることだけです。何名が適正值かは即答できませんが、例えば英文誌は内容

も違うし、年2回しか出していませんが、査読を除けば

3～4名で全てをこなしています。

〈学会運営〉

安全と照明，照明への 心理的アプローチ

Lighting for Safety : a Psychological Approach to Lighting

◀キーワード：自然環境，航空照明研究，心理的影響，危機管理

神 作 博
Hiroshi Kansaku
専門会員

1934年生。1957年千葉大学文理学部心理学専攻卒。現在、中京大学心理学部教授・同大学院文学部研究科長。1987医博，著書「航空照明」，「ライティングハンドブック」(共同執筆)等。

1. はじめに

筆者が照明学会へ入会したのは昭和35年のことであり，当時，航空標識の色の研究でご指導をいただいていた川上元郎先生（現・名誉会員）のお勧めであった。

この頃の筆者の関心は航空安全標識・航空灯火の見え方およびそれを左右する環境の照明・色彩についてであった。

2. 自然環境の照明・色彩の測定

昭和37年，航空標識などの背景となる自然環境の測光・測色の研究で，千歳空港の周囲の環境色の測定を行ったが，ハンディな測色器も入手できず，マンセル色票帳を用いての視感測定であった。また，航空機標識や航空灯火の視認性の研究に必要とされる環境内の輝度・照度，色温度などの測定を行ったが，これまたハンディな測光器が市場には存在せず，測定に際しては非常な工夫を要し苦労した。川上先生と測色器メーカーを訪問し，製品化を懇願したりしたのもなつかしい思い出である。

この頃，川上先生のご発想で長岡高専の池守先生，新潟大学の安藤先生達と共同で日本における天空光の輝度・色温度測定が始まった。筆者は立川市における測定を担当し，同時に小型のジェット機に搭乗し，北海道，関東，東海・中部各地方の地上から10000m上空までの各高度における測定を担当した（この測定においても測定器に関する苦労は同様であった）。

この活動は，後年，学会の昼光標準確立調査研究委員会の開設を促し，わが国の昼光標準確立の礎となり，その後のこの種の研究の前身となっていったと思われる。

これらと平行して筆者は海難救助用のダイマーカー（海染剤）の視認性向上の検討の必要から海の色の測定もヘリコプターの機上より行った。測色機器の不便さは相変わらずの状態であり，今日の測定機器類の精密化・小型化などをみると隔世の感がある。

当時，鉄道信号の見え方向上に資する野外の環境内の物体の測光・測色を行っておられた，故・正木光先生にいろいろとご指導も頂いた。

3. 航空照明の研究

昭和30年代の後半に民間航空機の大事故が相次いで発生し，それらの事故調査の一部に従事した。なかでもカナダ航空機の羽田空港着陸失敗事故では，霧の中での飛行場の航空諸灯火の視認の可否が原因究明上大きな問題となった。このことに端を発し，それ以後，当時の運輸省（現国土交通省）航空局などよりの「航空灯火の見え方」に関する研究委託が当学会へと出され，以後現在にまで及んでいる。これら一連の研究は，安全上はもちろんのこと，国際規格設定についても当学会の主要な社会貢献の活動の一つとなっている。当初は当学会関係者が航空灯火や航空機の運行などに不慣れであったためか，昭和52年頃まで筆者もこの一連の研究のメンバーに加えていただいた。その頃のエピソードを二つ。一つは，羽田空港での滑走路改修のチャンスを狙い，平行する滑走路への着陸機の動向を常に気にしつつ，滑走路末端に電気工事用の柱上作業車を着陸機の操縦席の高さに模して設置し，灯火の見え方実験を実施中あわやニアミスということをも経験したこともあった。また，別のときには，たまにしかえられない実験チャンスを有効に生かすべく欲張りすぎて，灯火輝度などの変化段階を多く組みすぎ，ついに夜明けにまで至ってしまったこともあった。

昭和45年の夏には，飛行場のある場所で唯一夏に霧の発生する北海道釧路空港に赴き，航空灯火の見え方の実験を行った。濃い霧の中でブリッチャード輝度計が湿気のため不正確となり，見え方結果との対応に不一致が生じた。人間の判断の強みが改めて実感された一幕であった。滞在中，宿舎の隣で毎朝催される魚市場で，脚がもげ割安になった毛ガニを沢山買い込み，関係者一同腹一杯食べた記憶は今でも忘れられず，なつかしい。

4. 照明と心理的実験

当時は心理学を専門とする学会員が極めて少なく，照明の人間心理に及ぼす影響についての実験結果が不足がちであった。

照明の量と見え方についての研究は Luckiesh らの研究に代表される研究が有名であり，また印東・河合両先